

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：37109

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350744

研究課題名(和文) 正課体育授業における訓育的機能がスポーツ観形成に及ぼす教育作用

研究課題名(英文) Educational Efforts for Disciplinary Function from View of Sport in PE Class

研究代表者

中島 憲子 (Nakashima, Noriko)

中村学園大学・教育学部・准教授

研究者番号：00301721

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：「スポーツ観」に関する調査を大学生を対象に行ったところ、スポーツ観を構成する「スポーツに対する価値意識」や「スポーツ像」は、組織的スポーツ活動経験の有無によって影響を受けることが示された。とりわけ日本はそのような傾向が認められた。また、「スポーツに対する価値意識」としての“陶冶性”は男子に比べ女子の方が有意に高い傾向を示した。さらに、学校体育における「学びの履歴」調査を行ったところ、生徒の「学習への構え」において、望ましい態度である“学習志向型”のタイプには、組織的スポーツ活動経験がある生徒の割合が多く含まれることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The sense of sport value and view of sport is affected by organized sport activities. Especially in Japan this tendency was suggested by the data. On the sense of sport value, data shows that the score of females in terms of Disciplinary Function was much higher than that of males. Furthermore, in the case of “Learning attitude” in PE classes, it is clear that the results of students’ attitude of “Learning-oriented” type displays a higher percentage during organized sport activities.

研究分野：スポーツ教育学

 キーワード：スポーツ観 スポーツ像 スポーツ価値意識 体育授業 組織的スポーツ活動 訓育的機能 学びの履歴  
 スポーツ・リテラシー

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) スポーツ・リテラシーと学校体育

人々が人間らしく且つ豊かな生活を享受する上で「スポーツ・リテラシー」は文化的教養の一つとして欠くことのできないものである。それほど、近年のスポーツにみられる大衆化・高度化の進展は注目し得る成果である。しかし、内的側面としてスポーツに関与する人々の態度や価値意識、あるいは行動様式に関わる内実については、スポーツの持つ本来の理想とすべき状態であるかは疑問視されている。つまり、急激な発展や高速化された情報社会において、スポーツへの参加態様が多様化し、さらにはスポーツ活動の場が変化し、加えてスポーツ参加者層の広がりへと変容してきた。このように、スポーツへの関与に関して多様な形態でスポーツに接する中、人々が創り上げてきたスポーツ文化そのものを素材として展開される学校期の「体育授業」や「クラブ・部活動」、「体育行事」など、教育における教科および学校全体を通して指導がなされているが、スポーツ教育システムは「それら」へ対応してきたとは言いがたい。

### (2) スポーツ・リテラシーの概念と内容

海野らは、スポーツ・リテラシー概念として「市民としてスポーツを楽しむ上に必要な力」言い換えれば「スポーツにアクセス(する、観る、視る、読む、話す、支える)し、分析・鑑賞・評価しながら、多様な形態でスポーツ・コミュニケーションを創りだす力」と定義している。加えて、このようなスポーツ・リテラシーを構成する内容として、「スポーツに関する知識・概念、技能」、「スポーツに関する知識・概念、技能」を獲得する方法、または獲得した知識・概念、技能を現実のスポーツ分析・鑑賞・評価に適用するスキル、スポーツに対する価値意識・態度、の3つの力が最低限として想定されることを示している。つまり、スポーツは今や実生活に深く根を下ろした文化活動であり、スポーツに関する文化的教養は、その時々必要と要求に即して内容を更新し、生涯にわたって学び続けながら獲得し、形成していくものであるとしている。このような「スポーツに関する文化的教養(学習内容)」をスポーツ・リテラシーとし、その学習内容を学校の教育実践で扱う際、子どもの学力の発達を人格的側面の形成といかに結び付けて達成するかという問題を検討することが必要である。

### (3) スポーツにおける陶冶と訓育

学校教育の中には、広義の人格形成とされる人間の発達を促すために、「教育課程」の中に「学力の形成」として、体育授業実践を通して習得される陶冶的側面をもった機能と、一方、民主的な行動能力や態度の形成として、「狭義の人格形成」が教科外の領域において習得される訓育的側面をもつ機能が

ある。教科指導、とりわけ体育授業においては、「陶冶＝学力形成(スポーツに関する知識、概念、技能、加えてそれらを活用する方法など)」だけを、また教科外における生活指導は「訓育＝人格形成」だけをねらいとすることを意味するものではなく、体育の授業の中でスポーツに関する知識・技能を習得していく。同時にその過程では、一人一人の感情や意欲など、人格特質が投入され、ぶつかり合う過程でもあり、したがって、その体育授業の中で必ずなんらかのスポーツ観や上手い子や苦手な子の関係や態度なりが形成されていくのである。しかしながら、体育教科の固有性あるいは特質ともいべきか、社会的なスキルや民主的な行動態度を身に付けるために「スポーツ・運動」を行う、というように目的手段論とした傾向が現在でも根強い志向として存在する。また、最近では体育における人格形成論といった見解や、「体育と社会的行動、体育と人間関係」との関係性を解明しようとする報告も見受けられるが、これらの論調は目標が陶冶的側面へ意図的に働きかける営み(教師から学習者へ)であるという、戦後の「下請け体育」の復古といった危険性を孕んでいる。

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、子どもたちのスポーツ経験の場が多様化する時代にあることが、必然的にスポーツに対する価値意識やスポーツ観形成に対する学校体育の作用が相対的に低下する現状を踏まえて、スポーツ経験の種類や年数、動機などの違いによる「スポーツ観」形成の実態を捉えるための調査を実施することとした。さらに、学校体育においてどのような学びの経験を体育授業で行っているかについて測定する体育授業における「学びの履歴実態調査」を実施した。

そこでこの分析を通して、学校体育がもたらす教育作用として「スポーツ観」に及ぼす影響を明らかにするための基礎的資料を得ることを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 「スポーツ観」の実態調査

筆者らが2012年度までに行ってきた先行研究で作成した「スポーツに対する意識調査」を実施した。日本における調査は、2012年4～6月および2013年4～6月であった。調査対象は、M県、T都、O府、F県、Y県に在籍する体育専攻学生695名および一般学部生の1年生423名とした。

韓国における調査は、2012年3～5月および2013年3～5月であった。調査対象は、S市近郊およびP市近郊に在籍する体育専攻学生314名および一般学部生の1年生217名とした。

スポーツ観に関する項目に欠損値、誤記入のある回答を除いた有効回答率は日本の大学1年生1,236名のうち1,131名91.5%、韓

国の585名のうち531名90.8%であった(以後、一般体育学生を“体育専攻”、一般学部生を“一般”と記す)。

本調査票は、「スポーツに対する価値意識」を構成する“社会的有用性”、“日常的有用性”、“陶冶性”の3因子(各因子5項目)と、「スポーツ像」を構成する「フェアプレイ」「規範意識」「協力・共同」「自己志向」「科学・合理主義」「環境保護」「努力志向」「レク志向」「勝利志向」「技術・戦略」「鍛錬・精神」「伝統志向」「ジェンダーフリー」の13カテゴリーで構成される。加えて、体育の好嫌(1項目) 教科としての有用性(3項目)およびスポーツイメージに影響を受けた外的要因(6観点)に順位を記してもらった。

なお日本における「スポーツ観」の調査票を、分析結果に基づいて韓国語、英語への翻訳作業を実施し、現地の連携研究者と共に論理的妥当性の検討を行った。

#### (2) 体育授業における「学びの履歴調査」に関する調査

日本の小学校・中学校および高校においてどのような学びの経験を体育授業で行っているかについて測定する体育授業における「学びの履歴測定バッテリー」を開発し、その学びの経験内容と学習成果との関連について明らかにした。日本における調査は2015年4~6月であった。調査対象は、T都、M県、K府、G県、Y県、F県の中学1年、高校1年(Y県、F県のみ)、大学1年生とした。回収された2,109名中、1,852名を分析対象とした(有効回答率87.3%)。

台湾においては、2013年9~11月の時期に、中学1年生(7校)、高校1年生(8校)、大学1年生(3大学)を対象に調査を実施した。回収された2,126名中、1,596名を分析対象とした(有効回答率75.1%)。

この調査票は、「学習成果」次元(「楽しさ感得」「共同・共感」「運動有能感」「実践的知識の理解」の4因子)、「学習への構え」次元(「自覚的学習」「規律遵守」「教えあい」「献身」の4因子)、「教師の指導性」次元(「肯定的相互作用」「認知的指導」「学習規律」「共感的雰囲気」「学習指導」の5因子)の3次元で構成される。

また、日本における「学びの履歴調査」の調査票は、因子分析結果に基づき、台湾語、韓国語、英語への翻訳作業を実施し、現地の連携研究者と共に論理的妥当性の検討を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 大学生におけるスポーツ観(日本)

専攻別・性別からみた「スポーツ価値意識」「社会的有用性」「日常的有用性」「陶冶性」の3因子(各因子5項目)で構成されるスポーツに対する価値意識において、日本の大学生を対象に専攻別に各因子の平均値を比較したところ、すべての因子および合計におい

て体育専攻が一般に比べ有意に高かった( $p<.01$ )。一方、男女別に比較したところ、「社会的有用性」および「日常的有用性」に有意差は認められなかったが、「陶冶性」因子において女子学生が男子学生に比べ有意に高い値を示した。また、「体育の教科としての有用性(3項目)」においても同様に体育専攻が一般に比して有意に高い傾向を示した。

##### 専攻別・性別からみた「スポーツ像」

日本の大学生を対象に13カテゴリーからなるスポーツ像において専攻別に平均値を比較したところ、体育専攻が一般よりも高い得点を示したものが、「勝利志向」「鍛錬・精神」「伝統志向」の3カテゴリーであった。さらに、一般が体育専攻より高い得点を示したものが、「規範意識」「協力・共同」「自己志向」「努力志向」の4カテゴリーであった。一方、男女別に比較したところ、男子に比して女子が高い値を示したものが、「フェアプレイ」「規範意識」「協力・共同」「努力志向」「ジェンダーフリー」であったが、逆に男子が女子よりも有意に高い値を示したのは「勝利志向」のみであった。

##### (2) 大学生におけるスポーツ観(韓国)

##### 専攻別・性別からみられる特徴

韓国の大学生の「スポーツ価値意識」においては、日本の結果と異なり、専攻別、性別において、すべての因子および合計得点に有意差は認められなかった。「スポーツ像」においては、体育専攻が一般学生より有意に高かったのは「鍛錬・精神」のみであった。また一般学生が体育学生よりも高い得点を示したのは「科学合理主義」「レク志向」と、日本と異なる傾向を示した。

##### スポーツに対するイメージに及ぼす影響

韓国においては、学校における運動部活動所属の割合は日本に比べて高くない。例えば高校時の運動部活動への加入率は38.6%、未加入率は61.4%であった(日本:加入率68.4%、未加入率31.6%)。そこで、スポーツ価値意識およびスポーツ観形成に作用する要因を探るために、「スポーツに対するイメージ」がどのようなところから影響があるのかについて質問した項目から分析を行った。調査では、「体育授業」「スポーツ漫画や雑誌などのメディア」「テレビのスポーツドラマやニュース」「運動部活動や稽古、クラブ」「友人・知人」「家族」の6項目の中から最も強く影響を受けたと思われるものから上位4つまで選択してもらった。

韓国で最も影響を受けたとされるものは「テレビのスポーツドラマやニュース」であり、次いで「体育の授業」であった。この順位は、専攻別であっても同様の結果を示した。一方、日本の場合は最も影響を受けたとされるものは「運動部活動や稽古、クラブ」であり、次いで「テレビのスポーツドラマやニュース」となっていた。このことは、日本に比

して韓国では、体育授業がスポーツ価値意識やスポーツ像に及ぼす影響があることを意味し、学校体育における教師の指導性の発揮の仕方如何によって、個々人の持つスポーツへの価値意識を高めうる場として寄与する可能性があることを期待することができると考えられる。

### (3) 体育授業における学びの実態 (日本)

#### 「学習への構え」タイプと「学習成果」

生徒の「学習への構え」次元の各因子を用いて、クラスター分析を行ったところ、「学習拒絶型」、「消極・苦役型」、「自己ペース型」、「学習志向型」の4タイプが析出された。これらの学習への構えタイプと学習成果との関連から、最も学習成果が高かったのは、「学習志向型」次いで「自己ペース型」、「学習内容不在型」であり、最も学習成果得点が低かったのが「学習拒絶型」の構えタイプであった ( $p < .05$ )。

#### 「学習への構え」タイプと「運動部活動所属経験」

さらに中学校および高校時における運動部活動所属の有無と生徒の「学習への構え」タイプの割合を比較した。中学校及び高校において運動部活動所属有りの生徒の方が「学習志向型」の構えタイプの割合が所属無しの子供よりも有意に高かった (中学校: 有 34.6%、無 18.2%、高校: 有 32.6%、無 20.7%、 $p < .01$ )。

#### 「教師の指導性」タイプと「学習成果」

「教師の指導性」次元の各因子をもとにクラスター分析を行ったところ、「消極的指導型」、「指導放棄型」、「学習内容不在型」、「教養学習融合型」、「学習支援型」の5つのタイプが析出された。この教師の指導性タイプと学習成果との関連では、最も学習成果得点が高かったのは、「教養学習融合型」次いで「学習支援型」、「学習支援型」、「学習内容不在型」であり、最も低い学習成果は「指導放棄型」の指導性タイプであった ( $p < .05$ )。

### (4) 体育授業における学びの実態 (台湾)

#### 台湾における体育授業の改革課題

台湾における学びの履歴調査は、2000年に「国民中小学九年一貫課程綱要」が交付され2001年から段階的に実施された新しいナショナルカリキュラム改定を受けた時期に当たる。この「九年一貫」にたどり着いた改定理由の中心は、スムーズな階梯間の接続 (小中学校間の関連性の低さ、統一性の欠如、教育の目的や方略の不明確さ、2014、中田) が日本と同様に喫緊の課題であることであった。鐘ヶ江ら (2008) らの研究において、台湾における児童・生徒の育ちと学びに焦点化した複合的調査によれば、「運動有能感」、「体育授業に対する態度」など運動や体育の学びに関する項目で、小学校から中学校にかけて有意な低下が認められた。さらに「社会的スキル」や「心の健康」など、日常生活の

中での育ちに関する項目においても、得点の低下が認められた。ここでは、こういった現象を改善すべく設定された新カリキュラムで学んだ子どもたちの学びの実態について「学びの履歴調査」結果から以下に示した。

#### 「学習への構え」、「教師の指導性」と「学習成果」の実態

台湾における調査から、「学習への構え」得点を階梯別に比較したところ、学習への構え因子を構成する4因子および学習への構え合計すべてにおいて、小学校よりも中学校の得点有意に低下する傾向が認められた。同様に、子どもたちの「教師の指導性」においても、すべての因子および合計において、小学校よりも中学校の得点有意に低下する傾向が認められた。また、学習成果次元においても、すべての因子および合計において、小学校から中学校にかけて有意に低下していた。

#### 学習成果次元と組織的スポーツ活動経験との関連

台湾における放課後のスポーツ少年団や運動部活動の経験割合は以下の通り、スポーツ少年団経験者は32.4% (未経験者: 67.6%)、中学校における運動部活動経験者は18.4% (未経験者: 81.6%)、高校における運動部活動経験者は、17.2% (未経験者: 82.8%)であった。この組織的スポーツ活動経験の有無と学習成果次元との関連を見てみたところ、小学校および中学校における「学習成果」、「学習への構え」、「教師の指導性」の各3次元の合計得点において、未経験者よりも経験者のほうが有意に高い得点傾向が認められた。さらに、「体育教科に対する有用さの認知 (3項目)」の合計得点においては、小学校、中学校、高校ともに、未経験者よりも経験者のほうが有意に高い得点を示した。このことから、台湾における体育授業における学びの実態として、学校以外でのスポーツ活動経験の違いが、学校体育の学習成果や教科に対する有用性に影響を及ぼしていることが考えられる。

### (5) まとめ

#### スポーツ観形成の実態から

日本の大学生の「スポーツに対する価値意識」および「体育の教科としての有用性」の結果から、体育やスポーツを専門に専攻する学生は、そうでない学生に比べ高い価値意識を持っていることが明らかとなった。また男子よりも女子の方が、スポーツに対して陶冶的価値認知が高い傾向にあった。「スポーツ像」における“フェアプレイ”や“規範意識”などのスポーツに対する平等性や望ましい規範態度に関するカテゴリーにおいても女子が男子より高かった。

#### 学びの履歴経験の実態から

一方、学びの履歴調査の結果においては、「学習志向性」タイプの生徒が高い学習成果を得ることは先行研究と同様に検証され、さ

らに組織的スポーツ活動（運動部活動所属）経験のある生徒は経験のない生徒よりも「学習志向性」タイプに所属する割合が有意に高いということが示された。スポーツに対するモノの見方・考え方（スポーツ観）は、運動部活動の経験が学校体育における授業への構えに影響を及ぼすことが特に日本の特徴としてみられた。

以上の結果を受け、スポーツ観が様々な要因の影響を受けながら形成される中で、「学校体育」がもたらす教育作用として教師の指導・教授・教育観との関係についても検討が求められる。今後の課題としたい。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

NORIKO NAKASHIMA, Current Issues State of Australia's Curriculum Reform: Focusing on the State of Queensland's PE. The 2015 International Conference for the 35<sup>th</sup> Anniversary of the Japanese Society of Sports Education, 査読有, 2015, pp.24.

JUNICHI KANEGAE, YUZO UNNO, NORIKO NAKASHIMA, TOMOHIKO TSUZUKI, RIYOKO KADOTA, TETSUYA KUROKAWA, A Case Study on how to Support Strategies for Development of School Physical Education in Developing Country. The 2015 International Conference for the 35<sup>th</sup> Anniversary of the Japanese Society of Sports Education, 査読有, 2015, pp. 85.

TETSUYA KUROKAWA, YOUN MI JUNG, YUZO UNNO, TOMOHIKO TSUZUKI, JUNICHI KANEGAE, NORIKO NAKASHIMA, RIYOKO KADOTA, TAKASHI KUCHINO, The Problems of PE Class in Korea Exposed by the Students' Learning Career : Focusing on Like/Dislike Feeling to PE Class, The 2015 International Conference for the 35<sup>th</sup> Anniversary of the Japanese Society of Sports Education, 査読有, 2015, pp.104.

口野隆史、門田理代子、續木智彦、中島憲子、黒川哲也、園庭の広さの違いに見る幼児の鬼ごっこでの相手の動きの予測に関する知識・認識、日本スポーツ教育学会第35回記念国際大会号、査読有、2015年、pp.87

〔学会発表〕(計20件)

TETSUYA KUROKAWA, YOUN MI JUNG, YUZO UNNO, TOMOHIKO TSUZUKI, JUNICHI KANEGAE, NORIKO NAKASHIMA, RIYOKO KADOTA, TAKASHI KUCHINO, The Problems of PE Class in Korea Exposed by the Students' Learning Career : Focusing on Like/Dislike Feeling to PE

Class, The International Conference for the 35<sup>th</sup> Anniversary of the Japanese Society of Sports Education, September 20, 2015, Nippon Sport Science University (Tokyo, Setagaya).

JUNICHI KANEGAE, YUZO UNNO, NORIKO NAKASHIMA, TOMOHIKO TSUZUKI, RIYOKO KADOTA, TETSUYA KUROKAWA, A Case Study on how to Support Strategies for Development of School Physical Education in Developing Country. The International Conference for the 35<sup>th</sup> Anniversary of the Japanese Society of Sports Education, September 20, 2015, Nippon Sport Science University (Tokyo, Setagaya).

NORIKO NAKASHIMA, Current Issues State of Australia's Curriculum Reform: Focusing on the State of Queensland's PE. The International Conference for the 35<sup>th</sup> Anniversary of the Japanese Society of Sports Education, September 19, 2015, Nippon Sport Science University (Tokyo, Setagaya).

小西隼平、海野勇三、中島憲子、鐘ヶ江淳二、續木智彦、体育嫌いの生成機序に関する研究 - 当事者の語りから読み解く -、日本スポーツ教育学会第34回大会、2014年10月25日、愛媛大学教育学部（愛媛県松山市）

YUZO UNNO, YOUN MI JUNG, TOMOHIKO TSUZUKI, NORIKO NAKASHIMA, JUNICHI KANEGAE, TETSUYA KUROKAWA, Only Student Knows the Reality in PE Classes and Can Tell That : Actual Conditions and Problems in Japan and South Korea. The 2<sup>nd</sup> International Conference of Korean Society for Health Education and Promotion, October 22-23, 2013, Korean National Sport University (South Korea, Seoul City).

黒川哲也、海野勇三、中島憲子、鐘ヶ江淳二、續木智彦、鄭英美、今日の韓国における高校体育の実態：共同性に着目して、日本スポーツ教育学会第33回、2013年10月19日、日本大学文理学部（東京都世田谷区）

鐘ヶ江淳一、海野勇三、中島憲子、續木智彦、黒川哲也、体育における学びの履歴とジェンダー：体育嫌いの児童・生徒に着目して、日本スポーツ教育学会第33回、2013年10月19日、日本大学文理学部（東京都世田谷区）

續木智彦、海野勇三、中島憲子、鐘ヶ江淳二、黒川哲也、小西隼平、体育嫌いの児童・生徒の学びの履歴：学習への構えタイプと指導性タイプの関連に着目して、日本スポーツ教育学会第33回、2013年10月19日、

日本大学文理学部（東京都世田谷区）  
小西隼平、續木智彦、海野勇三、中島憲子、鐘ヶ江淳一、黒川哲也、体育嫌いの児童・生徒の学びの履歴：学習成果、学習への構え、教師の指導性に着目して、日本スポーツ教育学会第 33 回、2013 年 10 月 19 日、日本大学文理学部（東京都世田谷区）

中島憲子、海野勇三、鐘ヶ江淳一、續木智彦、黒川哲也、体育における学びの履歴とジェンダー：学習への構えタイプに着目して、日本スポーツ教育学会第 33 回、2013 年 10 月 19 日、日本大学文理学部（東京都世田谷区）

海野勇三、鐘ヶ江淳一、中島憲子、小西隼平、教師教育における途上国への教育支援活動が持つ教育可能性、九州体育・スポーツ学会第 62 回大会、2013 年 9 月 15 日、九州共立大学（福岡県北九州市）

鐘ヶ江淳一、海野勇三、中島憲子、續木智彦、女子児童・生徒からみた体育教師の指導性の内実、九州体育・スポーツ学会第 62 回大会、2013 年 9 月 14 日、九州共立大学（福岡県北九州市）

小西隼平、續木智彦、海野勇三、中島憲子、鐘ヶ江淳一、体育嫌いの生成機序に関する基礎的研究 - 体育嫌いの子どもの学びの実相 -、九州体育・スポーツ学会第 62 回大会、2013 年 9 月 14 日、九州共立大学（福岡県北九州市）

續木智彦、海野勇三、中島憲子、鐘ヶ江淳一、小西隼平、児童・生徒の体育の好嫌が学習への構えおよび学習成果に及ぼす影響、九州体育・スポーツ学会第 62 回大会、2013 年 9 月 14 日、九州共立大学（福岡県北九州市）

中島憲子、海野勇三、鐘ヶ江淳一、續木智彦、女子児童・生徒の体育授業における学びの実態、九州体育・スポーツ学会第 62 回大会、2013 年 9 月 14 日、九州共立大学（福岡県北九州市）

YUZO UNNO, NORIKO NAKASHIMA, JUNICHI KANEGAE, TOMOHIKO TSUZUKI, Urgent Issues in Actual Conditions of PE Class and Curriculum in East Asia, 2013 International Research Forum in Sports and Physical Education, August 13, 2013. Philippine Normal University. (Philippine, Manila city).

YUZO UNNO, NORIKO NAKASHIMA, JUNICHI KANEGAE, TOMOHIKO TSUZUKI, Effectiveness of “Learning Carrier - Assess Scale” as a Key Instrument in PE Curriculum Management. 23rd Pan Asian Sports and Physical Education Conference, August 10, 2013. Philippine Cebu Summit Circle Hotel (Philippine, Cebu city).

JUNICHI KANEGAE, YUZO UNNO, NORIKO NAKASHIMA, TOMOHIKO

TSUZUKI, International Cooperation in Education for Encouraging School PE in Cambodia (Case Study) : Through Making a School-Based Sport Festival into a Community-Based School Events, 23rd Pan Asian Sports and Physical Education Conference, August 10, 2013. Philippine Cebu Summit Circle Hotel (Philippine, Cebu city).

TOMOHIKO TSUZUKI, YUZO UNNO, NORIKO NAKASHIMA, JUNICHI KANEGAE, Analysis of “Correlation between Learning Product, Learning Attitude and Teacher’s Instruction” in PE Class : In case of Japan and South Korea, 23rd Pan Asian Sports and Physical Education Conference, August 10, 2013. Philippine Cebu Summit Circle Hotel (Philippine, Cebu city).

NORIKO NAKASHIMA, YUZO UNNO, JUNICHI KANEGAE, TOMOHIKO TSUZUKI, What’s the Most Urgent Issue to be improved in PE Class and Curriculum? : Through Comparative Study in East Asia, 23rd Pan Asian Sports and Physical Education Conference, August 10, 2013. Philippine Cebu Summit Circle Hotel (Philippine, Cebu city).

〔その他〕(計 1 件)

本間輝、黒川哲也、子どものスポーツ観に体育授業が与える影響：教師のスポーツ観と学びの履歴に着目して、宮城教育大学教育学部体育・健康コース卒業論文、2016 年 3 月

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中島 憲子 (NAKASHIMA, Noriko)  
中村学園大学・教育学部・准教授  
研究者番号：00301721

### (2) 研究分担者

海野 勇三 (UNNO, Yuzo)  
山口大学・教育学部・教授  
研究者番号：30151955  
續木 智彦 (TSUZUKI, Tomohiko)  
西南学院大学・人間科学部・講師  
研究者番号：60468791  
鐘ヶ江 淳一 (KANEGAE, Jun-ichi)  
近畿大学九州短期大学・保育科・教授  
研究者番号：90185918  
黒川 哲也 (KUROKAWA, Tetsuya)  
宮城教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：50390258  
口野 隆史 (KUCHINO, Takashi)  
京都橘大学・人間発達学部・教授  
研究者番号：60192027